

## 平城遷都1300年記念シンポジウム「どう拓く、新たな交流と持続的発展の時代」

### 講演要旨

日 時：平成22年3月1日（月）午後3時～5時30分

会 場：ホテルニューオータニ大阪「鳳凰」

#### I. 基調講演「遷都1300年を迎えて」（薬師寺長老 安田 暎胤 氏）

奈良時代には、僧侶をはじめ多くの人々が遣唐使船に乗って、命がけで教を学び、先進国に追いつき追い越そうとし、また、いろいろな人たちが外国から日本に来た。奈良時代以降、積極的に海外のものを求めた時代と、鎖国して日本独自のものを醸成した時代とがあった。そういった努力のおかげで、日本は、今日、物質的に豊かな国になったが、物が豊かであれば本当に幸せなのか。「大和は国のまほろば」という。「まほろば」とは素晴らしいところと一概に言われているが、風光明媚だけではなく、理想的なところが「まほろば」ではないか。



空気や水が清らかで、自然環境が美しく保たれ、安心して食べられる食料が豊かに収穫できる場所、安心して暮らせる場所、そんなところが「まほろば」なのかと思っている。そのような「まほろば」に必要なものの一つは政治の力であり、もう一つは宗教、つまり心の力だと考える。

政治と宗教を1本の樹木で例えれば、幹、枝、葉、花が政治の力であり、根の部分が宗教ではないか。どんなに立派でも根が腐れば木は倒れてしまうし、根がしっかりしていれば、倒れても、また新しい芽を出す。即ち、心の持ち方が大事ではないか。

大和を国の「まほろば」にするために、「まほろば」をつくる心が大事ではないか。感謝の心、慈悲の心、敬いの心、詫びる心、許す心という、5つの心を持って実践することによって、未来に向けて世の中が「まほろば」になっていくと思う。

宇宙飛行士の毛利衛さんが宇宙から地球を見て、地球は美しい、地球はまほろばだとおっしゃった。真っ暗な中に浮かぶ、青く輝く地球は宇宙の中の本当にまほろばだ、帰れるところはそこしかない、国や宗教が違っても、すべてものを受け入れてくれる、それが地球なんだということをおっしゃったけれども、果たして、地球はすべての人間の欲望を受け入れてくれるかどうか。人間の欲望は無限で物は有限である。恐ろしいのも人間、素晴らしい「まほろば」にするのも人間だ。いつの時代でもそうだが、美しい心が美しい世界をつくっていくのだと思う。

日本はこれまで大陸からいろいろなことを吸収して繁栄したが、1300年間醸成して、これからはよりよきものを日本から発信していくことが必要だと考えている。奈良が日本の「まほろば」であり、日本が世界の「まほろば」である、世界を「まほろば」にすることが、これからの大事なことではないかと思う

## Ⅱ. パネルディスカッション「どう拓く、新たな交流と持続的発展の時代」

パネリスト	荒井正吾氏（奈良県知事）
（順不同）	鄭 祥林氏（中華人民共和国駐大阪中国総領事）
	千田 稔氏（奈良県立図書館長）
	下妻 博氏（(社)関西経済連合会会長）
コーディネーター	本間 正明（(財)関西社会経済研究所所長、 近畿大学世界経済研究所所長）



### 【要 旨】

本間所長のコーディネートの下、平城遷都1300年を迎える意義やアジアとの連携の重要性、アジアの持続的発展に向けた指針、文化・観光面でのアジアとの交流について、荒井知事、鄭総領事、下妻会長、千田館長からこれらの問題についてのそれぞれの見解が示された。詳細は以下のとおり。

### 1. 平城遷都1300年の意義

#### <千田氏>

平城京が70年間持ちこたえたことによって、現代の日本がある。平城京の時代というのは大変不安定な時代だったが、日本の基礎をつくり上げた。

その平城京時代でもう一つ大事なものは、中国あるいは朝鮮半島など外来文化を取り入れた点。これは明治維新のヨーロッパ文化を取り入れた東京と似ている。ただ、平城京の場合は、仏教文化という、つまり精神そのものも物と一緒に取り入れたという、この強さを持っていた。

それから、もう一つが「万葉集」。「万葉集」には非常にエネルギーがあり、これが奈良時代の文化をつくり上げた。

さらに、法治主義の国家。律令というものを実際にそこで施行した法治主義の国家と



いうものが70年間、続いた意義というのは非常に重要で、今日の日本の礎を築いた点を指摘したい。

#### <荒井氏>

奈良時代の意味は、千田先生の発言と重複するが、三つあるように思う。一つは、律令国家。二つ目は仏教が伝来して、神道などと調和した。もう一つは、大変国際性があった時代であった。これほど国際性があった時代は、日本の歴史でなかったかと思われるほど国際的な時代であった。

この三つを今のエネルギーにどのように表現するか。時あたかも唐のグローバル時代と今のアメリカを中心としたグローバル時代という中で、どのように生きていくのか。東アジアはどのように生きていくか、東アジアがどのように仲よくするかということを考えるいい機会ではないか。



#### <下妻氏>



今回、経済効果からみた1300年祭は、関西社会経済研究所の試算によれば、奈良県で約500億円、その他の地域は200億円強で、かなりの経済効果が期待できる。奈良ばかりでなく、関西のためにこの平城遷都1300年記念祭をできる限り盛り上げていきたい。

また、この関西は奈良を含む京都や大阪を含めて、いわゆる国宝の全体の5割強がこの地に集積しており、極めて文化的にも歴史的にも大変価値のある地域。今回の遷都1300年を契機として、アジアのみならず世界に対してこういうところが日本にあるよということを大いに発信していくべきだ。

また、いわゆる東アジアというものの見方をどういう形でいくのか。単に文化、歴史ということばかりでなくて、これからの未来に対する関西からの知的発信、技術的発信をこの1300年祭を契機に一緒に考えられればよいと思う。

#### <鄭氏>

千年前に日本は中国や世界に目を向け、対外交流を始めた。日本は、海外からいろんなことを導入して、律令国家とか仏教伝来など多くのものを取り入れた。こうしたことは今の時代に、現実的な意義を持つものである。今は、国際協力の時代。国際的に人々がお互いに学び合い、お互いに協力し合う、お互いにWIN・WINの関係をつくることが非常に大事。この平城遷都1300年祭を



通じ、こうした目的を達成できれば非常にすばらしいことだ。

奈良、京都あるいは関西は、日本人の精神、心の故郷だと言われている。実際に住んでみて、確かに関西、京都、奈良という重みを感じる。

外国人にとって、特に中国人にとっては、関西、奈良、京都は、大阪も含めて非常に魅力的な所。私はいろんなところで中国人に対して、「昔の唐の時代のものが関西にたくさん残っている。見に来てください」と盛んに言っている。

## 2. アジアとの連携の必要性

### <下妻氏>

今、日本が閉塞的な状況にあることからいえば、アジアとの連携はまさに必然的なことである。日本はアジアの中では少し近代化を先んじたが、最近はかなり追い上げられている。

人口的に見ても、日本は今1億2,780万人だが、2050年には1億人を切ると言われる一方、例えばインドネシアは今、2億3,000万人になっているし、ベトナムも6,000万人と言っていたのが、今や8,500万人で、聞く所によると平均年齢が30歳程度というから、日本に比べ20年近くギャップがある。

関西は、環境技術でまさに先進地域で、アジアに対して貢献しながら、結果的に評価していただくということしか、我々のこれから未来に向かう発展の道はないとも認識している。

また、昨年4月に中国・北京で水環境フォーラムを開催したが、大阪市と組んで、パッケージでソリューション事業を展開している。

今年は平城遷都1300年という大きなイベントに加え、上海で万博が開催される。関経連では、関西国際空港会社の村山前社長に応援団長になってもらい、上海万博応援団を結成して、上海万博を盛り上げ、奈良にも来てもらうというような、交流のキャンペーンをしている。ビジネスの交流のみならず、人の交流、観光客の交流を手がけ、アジアとともに生きる、そういう関係づくりを一生懸命やっていきたい。

### <荒井氏>

日中韓、東アジアの将来にとって何が一番大事かというのと、どういう気持ちでつき合うのかというのが一番大事。オリンピックで韓国、中国の人がとったら、ああ、すごいなというような気持ちが自然とわき上がるような心理状態になるのは、共同体などをつくる際、一番重要だ。

1000年以上も前の歴史を一衣帯水の東アジアで思い出すと、また違う世界観、未来に向けたエネルギーが出るというふうに思っている。

### <鄭氏>

近年、中国経済は全体の量、実力の面から見て、飛躍的な上昇を遂げた一方で、大変難しい問題も抱えている。産業構造が発展段階にあることや、資源消費型の企業が多いこと、都市と農村間、企業間の収入格差などだ。しかし、こうした問題は困難であると

同時にチャンスともなるものである。内需拡大の余地が大いにあり、内需拡大を通して国民生活が改善され、生活を高めるようになると思う。

上海万博のメインテーマはベターシティ、ベターライフ。これは中国の国づくりを通して、人々の生活が良くなっていくというスローガン。日本では40年前にオリンピックを行い、その数年後に大阪万博が行われた。今、中国は、まさに2008年のオリンピックの後に今年、上海万博を迎える。

中日両国の経済貿易関係は補完関係にあり、今の段階は競争関係でない。協力関係を通して、経済のお互いのメリットがすぐ出てくると思う。

もう一つ、投資面で、これまで日本は一方的に中国に投資していたが、これからはお互いに投資するようになればいいと思う。日本の大企業が中国にもう何万件も入っている。多少中国の企業が日本に入って、買収とかいろんな形の協力の関係ができることは自然なことと思う。

### 3. アジアの持続的発展に向けた指針

#### <下妻氏>

関西は、大体中国向け、アジア向けの輸出によって成り立っているといっても過言ではない。いわゆるパネルベイ、グリーンベイと呼ばれるように、液晶にしるプラズマにしる、そういうパネルから始まってバッテリー、いわゆるリチウムイオン電池も含めて、この地に集積しており、環境をテーマにアジアの方々と手を組んで事業展開をすることが重要だ。

それから、我々の持てる力というものを理解していただき、あるいは活用していただいてコラボレーションができれば、日本はまだまだ貢献できる。それが関西における持続的発展のキーファクターだと認識している。

毛利衛さんがまほろばだと言った、このきれいな地球を守るためには、環境について我々は、重点的にビジネスのルールが環境になったというぐらいの認識を持って進めなければいけない。また、それに資するだけの潜在的技術力がこの関西にはある。何とか我々は、懸命に関西の各企業の持っている力を結集させていきたい。それで、官民一体となったパッケージでこの関西を売り込むことが、アジアの持続的発展にも資するし、また関西の経済発展にも資すると思う。

#### <千田氏>

経済がグローバル化しても、必ずそれぞれの国の個性というものがくっついてくる。経済を支えているのが、それぞれの風土に根づいた文化。関西の技術の潜在力が非常に強いのはそのとおりだが、このとき関西というものがどのように文化的な発信力を持つかということが問題になる。

関西が生まれてきた生い立ちを考えると、伊勢神宮を中心とした神の文化であり、その文化に乗っかった仏教の文化であり、一言で言うと、細やかな文化を関西でずっと成長させてきた。この細やかな文化というのが関西のテクノロジーに随分影響を与えてきている。



もう一つ、東アジア共同体についてだが、我々アジアの人間にとって不幸なことに、アジアという言葉は我々が生み出した言葉でなく、ヨーロッパがヨーロッパの向こうの方をアジアと言った。よそ様につくっていただいた地域名であるということは、ある意味で難しい問題を抱えている。

つまり、文化的な統一感がなかなかアジアという言葉からは出てこない。その際、よく言われるのが、東アジア共同体というのは、一つのまとまった空間として、どの地域を入れていくかということで、これは今後、議論になってくる。ASEANも入れるのか、中国、日本、韓国だけに東アジア共同体をとどめようという考え方で随分違ってくる。そのときアジア共同体あるいは東アジア共同体なるものが実体的な意味を持っていくのか。つまり経済だけがひとり歩きして、それを支える文化というものがどこかに置き忘れられてしまわないのかという問題が非常に重要だ。

#### 4. 文化・観光面でのアジアとの交流

##### <鄭氏>

中国大陸あるいは香港、台湾から日本への観光客が年々増えている。聞いている限りでは、中国の観光客の日本に対する印象は非常にいい。日本での観光は非常に安心感があるというのが第一。安心してショッピングできる。安心して食事できる。

当然、生活慣習、文化の異なる所が多く、その人数が多くなるにつれて、日本の方が、中国人はルールを守らない、あるいは礼儀がよくないとか、そんなイメージは必ず出てくると思うが、こうした問題は次第に解決されてくると思う。

改善すべき課題としては、ビザの問題や言葉の問題がある。中国国内の日本大使館や総領事館のサービスの向上の他、ビザセンターなどをもっと設けたらどうか。

それから、日本の国内に案内電話をつくったらどうかとも思う。空港で、あるいは観光地で、例えば高速道路を走っているときに緊急電話のようなもので、とにかく困った人には、その電話をかければすぐ中国語を話せる人が出てくれば、すぐに問題が解決できる。

両国の関係が安定発展して、観光業も自然に必ずこれからずっと持続的に発展するものと信じる。

##### <荒井氏>

観光は、経済的にも今重要な産業になってきているし、経済活動の潤滑油として共通の生活体験を共有するということで、ヨーロッパの動きを見ると重要な活動になってきている。

日本は、そういう観光を内需的にも、あるいは外需的にも十分な産業に育てているかという点については、奈良も十分でない面があると思う。日本人は与えられたスタンダードのいい品質のものをつくるということでは得意だったが、相手の気持ちを読み、サービスするというのは、歴史的にも十分でなかったと思う。

奈良については、いい点と悪い点がある。いい所は、文化財がとても多い、歴史があ

るということだが一方、本間所長がおっしゃったように、観光産業として十分それを活用しているかという点では大変心もとない。奈良は、特にホテルのキャパシティは不足している。

こういうお祭りを一過性にしないで、リピーターが来られるように、一度行ったけれども、また行きたいというお祭りにするには、楽しかったけど、まだまだ見るところがあるぞと言って帰ってもらわなきゃいけない。

こういうお祭りが、中国、韓国、また外国の人、日本人のリピーターを養う一つのワンステップになればというふうに思っている。

#### <千田氏>

文化というのは、日々の生活が文化である。別に博物館へ行ったり美術館へ行ったりというのが文化ではなくて、日々の生活の仕方が文化であって、その日々の生活の仕方の共通点を、例えば東アジアの人々と一緒になることができれば、これはこれで経済にすごくいい影響を与えていくと思う。

そのときに、平城京というのは、やっぱり東アジア文化の一つの日本における実現モデルであったという、そういった点について平城京を通じて我々はもう一度認識していきたいと思う。

(文責：事務局)